



東北復興 PSW にゆうす

東日本大震災から10年目を迎えました。先が見えない日々を過ごした当時は、10年目の暮らしは想像できませんでした。ここまで落ち着きを取り戻すことができたのも、全国の構成員の皆さまの応援のおかげと感謝しております。今号は、「3.11」に寄せて岩手、宮城、福島の3県の支部長からのメッセージ特集です。それぞれの想いや現地の今を伝えます。

福島県支部

支部長 水野 英一



東日本大震災から今年の3月11日で9年が経過。その間、福島県内では原発事故の影響により避難区域に指定された地域も徐々に解除され、今春からはJR常磐線が全線復旧になる等、インフラ復興は着実に進んでおります。

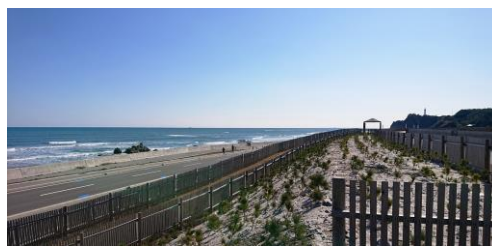
その一方で時間の経過と共に、長期に亘る避難生活により家庭やコミュニティの希薄化が進行、この先の生活に不安を抱く住民も少なくありません。

この9年を振り返ると、当支部としてそれらを「震災復興支援」ととらえ、どのように関わるべきか常に考えていたように思います。その結果、過去の「東北復興PSWにゆうす」で取りあげられていたコーヒータイトに現在も関わってくれる構成員がいること、構成員の有志らで「災害対策部会」を立ちあげたこと、震災を含めた災害に関する多くの研修等を企画してまいりました。

前記した活動の末、どの都道府県よりも「震災復興支援」を意識した構成員が多くいる支部になっているのではないかと、前支部長から引き継いだ今、それを自負しております。

昨年10月の台風19号等の大雨被害において、福島県内も広範囲で被害がありました。当支部として、これまで東日本大震災を通じ数々の会議や研修、支援など経験したことを、今役立てることに躊躇はらないという思いから、「災害対策本部」の設置にいたりしました（2020（令和2）年1月31日解散）。

これも「3.11」から学んだことだと思っております。



現在の豊間海岸

岩手県支部

支部長 加藤 暁子



「東日本大震災津波」、という言葉を常に意識しているわけでもないのですが、ちょっとしたきっかけで、あの地震や津波を思い出すというより、考えるというのが、今の心の距離感のように思います。とても曖昧でわかりにくい言い方で申し訳ありません。「申し訳ない」という言葉も、私にとっては震災時、内陸に

いて感じた無力感を想起させることがあります。あの震災以降、地震、台風、豪雨と大規模災害は珍しくなくなった感があり、おかしな慣れのようなものがありはしないかと、落ち着かない心持ちもします。人の意識がいかに風化しやすいものか、先人の忠告を忘れてしまった結果、危険なところで生活を営んでいたことに気がつかなかったことが盛んに指摘されましたが、その感覚は10年も持たないものなのではないかと感じています。

だからこそ、「3.11」に限らず、その後の豪雨や台風による被害などでの経験を精神保健福祉士としての活動に取り入れ定着させるには、意識的に取り組む必要があります。災害対策計画があっても、それを実効性のあるものとするためには、人と人がつながっていなければと、つくづく感じます。

会員は増えても組織としての凝集性を高めるのは、なかなか難しいのですが、愚直に地道に「つながろうよ」のメッセージを出し合うことが大切なのかな、と思う今日この頃です。



津波の威力を物語る震災遺構（宮古市たろう観光ホテル）

宮城県支部

支部長 小野 正生



宮城県は東日本大震災において、死者 10,566 人（震災関連死を含む）、行方不明者 1,219 人、全壊家屋 83,005 戸、半壊家屋 155,130 戸等、極めて甚大な被害が発生しました。

東日本大震災は戦後最大規模の自然災害と言われ、地震そのものによる被害だけでなく、津波などの被害も甚大でした。

私自身、震災発生日時が数日前後していたら、気仙沼市で被災していたと思います。出張先は南気仙沼で、震災後に船舶用燃料タンクが倒壊し、海に重油が流出し火の手が上がった付近でした。私は津波火災に巻き込まれ命を落としていたかもしれません。

震災発生から 9 年の月日が経過しました。現在宮城県は宮城県震災復興計画に基づいて更なる発展に向けた戦略的な取り組みとして「発展期」を迎えています。2020（令和 2）年度が最終年となりますが、すでに学校、病院、道路などのインフラ復旧は概ね完了し、3 県の製造品出荷額等は震災前の水準までほぼ回復しました。津波被災農地は 89% で営農再開可能、水産加工施設は 95% で業務再開、グループ補助金交付先企業の 45% が、震災直前の売上水準まで回復し、概ね順調と言われています。住宅などの生活基盤であるインフラの整備や日本を支える産業や生業の復興に多くの予算が充てられてきましたが、メンタルヘルス等の被災者支援に対する予算や人員は十分なものだったのかについては疑問を感じております。

先日、仙台市で行われたシンポジウムで、岩手、宮城、福島の前被災 3 県で 2016（平成 28）年から始めた子どもたちの「表現力」や「記憶力」、「語彙（ごい）力」についての調査報告がありました。私はその報告内容に驚愕しました。子どもたちの「記憶力」「表現力」の検査で発達に数か月から半年の遅れが見られ、「語彙力」の検査でも発達が同じ年齢の子どもの平均からおよそ 8 か月遅れがみられたそうです。調査では「震災後の混乱が保護者らを通じて、子どもたちに間接的な影響を及ぼしている」と分析され、保護者の健康については、3 割余りにうつ傾向や不安状態など精神的不調が見られるそうです。また、保護者と子どものコミュニケーションが十分にとれていないことが一因と指摘していました。

震災から 9 年経過していますが、未だ被災者や子どもたちの環境等に暗い影を落としています。震災で生活基盤が壊れ、さらに地域で孤立して生活や子育ての苦しさをどこにも出せない家庭もあり、地域のネットワークづくりなどを通じて、こういった家庭を手厚く支援していくことが必要だと言われています。

2021（令和 3）年度にはメンタルヘルスに関する被災地活動も転換期を迎えます。予算と人員が縮小され本格的に地域移行を行っていくこととなります。

これからも被災した地域の文化や特性に根ざしたメンタルヘルスの啓発活動や、心のケアを供給する体制の維持が大切になってくると考えています。今後も被災地支援を引き続き宜しくお願いいたします。私ども宮城県精神保健福祉士協会もいま一度原点に戻り、被災者支援について継続して出来ることを考えていきたいと思っております。

「復興支“縁”ツアー in みやぎについて（中止の経過報告）」

3 月 14 日、15 日に予定していた復興支“縁”ツアー in みやぎですが、今年度の開催を中止することにいたしました。COVID-19（新型コロナウイルス）が猛威をふるい、2 月 16 日に政府の専門家会議に於いてテレワークの促進や時差出勤、人込みを避ける行動、不要不急の集まりの自粛などの呼びかけがあったことを受け、苦渋の選択でしたが、諸般の事情を鑑み翌 17 日に開催中止と判断した次第です。

毎年恒例のツアーでしたので、開催中止は痛恨の極みです。東日本大震災から 9 年もの時間が経過しますが、今年度においても催行人数割れをすることなく計画できていたのは構成員の皆さまのおかげであり、これまで紡がれてきた“縁”あってこそ、と心より感謝の念に堪えません。まだまだ落ち着きませんが、皆さまにおかれましてはくれぐれもご自愛くださいますようお願い申し上げます。取り急ぎ、開催中止とその経過報告に代えさせていただきます。

（東日本大震災復興支援委員会 委員長 菅野）

編集後記

丸 9 年を振り返ると、今ではなかなか会えなくなった皆さまとの、あの時一緒に感じたこと、考えたこと、活動をご一緒した記憶が鮮明に思い出されます。ここまで繋いでくれた方々の想いを、今後も繋いでいかなくてはと改めて想う「3.11」です。



（伏見）

【ご意見・ご感想をお寄せください】

本紙では被災した各地の仲間へのメッセージ及び被災地からの情報発信など、相互交流ができる紙面づくりを目指しております。全国どなたからのメッセージでも構いません。本紙へのご意見・ご感想も大歓迎です。それぞれのお立場からの声をお聞かせください。お寄せいただいたメッセージは、本紙面や本協会ウェブサイトにてご紹介させていただきます（原則として投稿者氏名以外の個人情報は掲載いたしません）。

投稿方法は FAX もしくは E-mail (office@japsw.or.jp) にてお願いいたします。

★題名に「PSW にゆうすについて」とご記入ください。★

第 45 号 2020 年 3 月 15 日発行

編集：東日本大震災復興支援委員会

発行：公益社団法人 日本精神保健福祉士協会

〒160-0015 東京都新宿区大京町 23-3 四谷オーキッドビル 7F TEL. 03-5366-3152 FAX. 03-5366-2993

★URL : <http://www.japsw.or.jp/>

★東日本大震災復興支援サイト <http://www.japsw.or.jp/ugoki/f-jyoho.html>